



# FUKUSHIMA 市民インタビュー

このコーナーでは、福島市のさまざまな分野で活躍する人や団体を紹介します。今回は、日本南極地域観測隊に第32次から参加し、第48次、第50次、第57次と南極での越冬を4回も経験された福島市出身の梅津正道さんにインタビューしました。

私の仕事は、大型アンテナで宇宙からオーロラを観測する人工衛星のデータ受信などでした。その他、銀河雑音、大気電場、地磁気の観測なども行い、それに関わる機

器の保守・点検作業も行っていました。現在の南極は昔に比べて通信環境は良くなりませんが、それでも必要な物はすぐ手に入りません。仕事で頼れる人もいない中、知恵を絞って問題を解決しなくてはいけないのが大変でした。しかし、それが結果的に今の自分の自信にもつながっています。

27年前に南極に初めて行った時、仕事や慣れない共同生活などに追われ魅力を感じる間もなく帰国してしまいました。時間の経過とともに記憶が薄れていき、何か南極に忘れ物をしたような感覚になりました。「再び南極に行きたい」とチャレンジして今に至っています。

南極で生活すると夢や希望が湧いてくるんです。日本の豊かさの中で生活しているとそれが当たり前で、家族や周りの人たちが薄れてしまいがちですが、南極ではたった30人で厳しい冬を乗り越えなくてははいけません。また、人間にとって厳しい環境で生きているアザラシやペンギンを見ると、自分の価値・役割、将来を考えさせられ、次のチャレンジへのパワーを充電できるのが自分にとっての南極の魅力です。

11月にこむこむで開催するペンギンとオーロラ展（P11参照）では、南極の今と昔（60年前）の比較を写真や動画で紹介しています。私は南極の様子を見て、子どもたちに夢や希望を持って欲しいと思っています。自分もそうであったように、コツコツと勉強して努力を積み重ね、困難があっても諦めなければ夢は叶えられることを伝えて、子どもたちが夢にチャレンジするきっかけにつながればうれしいです。

南極の魅力は？  
南極は人間による環境汚染が地球上で最も少なく、地球環境を正確に観測できる貴重な場所です。世界各国で協力し南極の観測を進め、将来の地球環境を予測したり、環境問題の研究に役立てていきます。オゾンホール※の発見も観測隊の代表的な成果の一つです。また、観測隊が採集した隕石は1万7千個にも及び、地球惑星科学の発展にも貢献しています。



日本南極地域観測隊員を務めた  
梅津正道さん



▲南極のオーロラと星空

※オゾンホールとは、南極上空の成層圏のオゾン濃度が9～10月に減少する現象。

器の保守・点検作業も行っていました。現在の南極は昔に比べて通信環境は良くなりませんが、それでも必要な物はすぐ手に入りません。仕事で頼れる人もいない中、知恵を絞って問題を解決しなくてはいけないのが大変でした。しかし、それが結果的に今の自分の自信にもつながっています。

27年前に南極に初めて行った時、仕事や慣れない共同生活などに追われ魅力を感じる間もなく帰国してしまいました。時間の経過とともに記憶が薄れていき、何か南極に忘れ物をしたような感覚になりました。「再び南極に行きたい」とチャレンジして今に至っています。

南極で生活すると夢や希望が湧いてくるんです。日本の豊かさの中で生活しているとそれが当たり前で、家族や周りの人たちが薄れてしまいがちですが、南極ではたった30人で厳しい冬を乗り越えなくてははいけません。また、人間にとって厳しい環境で生きているアザラシやペンギンを見ると、自分の価値・役割、将来を考えさせられ、次のチャレンジへのパワーを充電できるのが自分にとっての南極の魅力です。

11月にこむこむで開催するペンギンとオーロラ展（P11参照）では、南極の今と昔（60年前）の比較を写真や動画で紹介しています。私は南極の様子を見て、子どもたちに夢や希望を持って欲しいと思っています。自分もそうであったように、コツコツと勉強して努力を積み重ね、困難があっても諦めなければ夢は叶えられることを伝えて、子どもたちが夢にチャレンジするきっかけにつながればうれしいです。

南極の魅力は？  
南極は人間による環境汚染が地球上で最も少なく、地球環境を正確に観測できる貴重な場所です。世界各国で協力し南極の観測を進め、将来の地球環境を予測したり、環境問題の研究に役立てていきます。オゾンホール※の発見も観測隊の代表的な成果の一つです。また、観測隊が採集した隕石は1万7千個にも及び、地球惑星科学の発展にも貢献しています。

## 和算を 知ろう

皆さん「和算」を知っていますか？昔、福島では和算が盛んでした。今回は福島で活躍した和算家たちを紹介します。

福島の和算は、江戸時代の後期から明治時代にかけて庶民の間に広がり、そのきっかけを作ったのは、土湯出身の和算家・渡辺一です。彼は、福島県内最大の和算の流派・最上流の創始者である会田安明（山形出身）との運命的な出会いで才能を認められ、江戸に出て会田のもとで学びました。渡辺は会田の弟子の中でも特に優れていたといわれています。

でもありません。丹治重治は農業を営みながら金谷川村村議や村長を務め、佐藤元龍は漢学、医術にも通じ荒井小学校の初代校長になっていきます。

また河野松右衛門には100人を超える門下生がいました。彼ら和算家の業績をしのいで門下生たちが建てた顕彰碑が現在も残され、福島での和算の隆盛の要因の一つが、優れた指導者と門下生たちとの人間的つながりであったことが分かります。



▲福島稲荷神社の境内にある丹治重治(明齋)の顕徳碑



▲福島の和算の礎となった渡辺一の肖像画